

アメリカ固有の素材を求めて：
James Nelson Barkerの
The Indian Princess, Superstition論

KUROKAWA, Yoshiteru / 黒川, 欣映

(出版者 / Publisher)

法政大学文学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

Bulletin of Faculty of Letters, Hosei University / 法政大学文学部紀要

(巻 / Volume)

49

(開始ページ / Start Page)

7

(終了ページ / End Page)

31

(発行年 / Year)

2004-03-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00003997>

アメリカ固有の素材を求めて

James Nelson Barker の *The Indian Princess, Superstition* 論

黒川 欣映

1.

『アメリカ演劇史』(*A History of the American Drama*)の著者 Arthur Hobson Quinn は James Nelson Barker (1784-1858) のアメリカ固有の素材選択について、それは偶然の結果でもないし、偏狭な信念によるものでもなく、当時彼がそういうドラマの不足を強く感じていたからだと、次のように述べている。

Barker's choice of American themes was not accidental nor was it parochial. He knew other literatures and he made use of them, but he felt keenly the lack of a native drama and he did his best to fill the lack (Quinn 137).

ニューヨークの John Street Theatre ではじめて上演されたアメリカ人劇作家の喜劇は Royall Tyler の *The Contrast* (1787) だったが、それに続いて *The Father; or, American Shandyism* (1789) が上演されている。この作品でデビューした William Dunlap (1766-1839) は、それ以降しばらくの間アメリカの演劇界に大きな影響力を持つことになる。彼は自身のオリジナル作品や翻案、翻訳を含めて、約60本の舞台劇を提供したばかりか、1796年から2年間 American Company の幹部俳優 John Hodgkinson や Lewis Hallam と共に John Street Theatre の共同経営に当たり、その劇団が Park Theatre に移ると、1798年から1805年までのほとんど8年間、ただ独りでその劇場の経営に当たり、ついには破産に追い込まれて、劇場を閉じた。

Dunlapの傑作と言われているオリジナル作品の一つ *André* (1798) では、独立戦争を背景として、戦場における総司令官 George Washington の軍人としての厳しさと戦争というものの非情さが描き出される。タイトルになっている *André* という人物はアメリカ独立革命軍が捕虜として捕らえているイギリス軍軍将校で、彼がスパイ行為の罪で処刑されることになっていることを知り、革命軍将校 Bland が戦場で自分の命を救ってくれた恩人として、*André* の助命を総司令官に嘆願するのである。イギリス軍側はもし *André* が処刑されるならば、自軍が捕虜として捕らえている Bland の父親を処刑すると警告しているが、Washington 将軍は頑として嘆願を聞き入れない。

独立革命のヒーロー Washington は、その後 1789 年に初代の大統領となり、97 年まで二期の間その職についていた同時代人であって、この作品はアメリカを舞台とした時事的なテーマを取り上げたものであった。

一方、Dunlap の数多くの翻訳劇の中で 13 本が「ドイツのシェイクスピア」と呼ばれていた劇作家 August Friedrich von Kotzebue (1761-1819) の作品で、その中で成功作 *The Stranger* (1789) は “an extremely sentimental domestic melodrama, appealed greatly to the Park’s audience, and its success helped Dunlap to keep the theatre open” (Vaughn 41). というわけで、ヨーロッパを舞台とする「センチメンタルな家庭劇」「メロドラマ」という大衆性を持ったものであることがわかる。

Barker は 1804 年から 36 年にかけて 10 本の戯曲を書いているが、その中で印刷されて残っているのは 5 本である。そのなかで、*The Indian Princess; or, La Belle Sauvage* (1808) と *Superstition; or, The Fanatic Father* (1824) はそれぞれ、ヴァージニアにおける初期入植者とインディアンのかかわり、ニューイングランド地方におけるピューリタニズムの独善性、排他性というアメリカ固有の素材を取り上げた点で注目に値する。

The Indian Princess は *Ponteach* (1766) 以来はじめてアメリカ人によって書かれたインディアンを扱うドラマであり、*Ponteach* が未上演であるために、はじめて舞台上上がったインディアン劇ということになる。

Ponteach はポンティアックと発音され、Ottawa 族の酋長の名前である。この作品の作者はマサチューセッツ州生まれの Major Robert Rogers (1731?-95) で、

French and Indian War (1754-63) に従事し、インディアンに対して同情的だったと言われる。この戦争は、ヨーロッパにおけるイギリス対フランスの七年戦争に呼応して、フランス・インディアン同盟軍対イギリス・植民地同盟軍という構図で戦われたものであった。

Ponteach の内容はインディアンに対して無関心、無神経、強欲なイギリス人を描き、彼らが現地人とは友好的にという本国からの通達を無視して、狩猟気分で面白半分には彼らに対して発砲するなどの横暴を働いたあげく、ポンティアックに率いられる敵意のない高貴なインディアンたちが破滅に追いやられる悲劇である。

それに反して、*The Indian Princess* は伝説的なインディアンの酋長の娘 Pocahontas と、1607年に第一次入植者としてヴァージニアに Jamestown を作った Captain John Smith 一行の一人 Rolfe とのロマンスを描いている。

また *Superstition* では、ピューリタニズムの独善性、排他性の一つの現象としてヨーロッパの中世以来続く witchcraft (妖術) という概念が取り上げられており、すぐに1692年にマサチューセッツ州 Salem で大規模に起こった魔女狩り事件を連想させる。この事件については、20世紀に入って Arthur Miller が *The Crucible* (1953) で真正面から取り組んで、政教一致による初期ニューイングランド社会の特異性を描き出すことになる。

この時代の演劇活動は、主としてボストン、ニューヨーク、フィラデルフィア、ワシントン D. C.、チャールストンなどで展開されていたが、Barker の作品のほとんどはフィラデルフィアで上演されている。*The Indian Princess* は1808年4月6日にフィラデルフィアの Chestnut Street Theatre で初演され、翌年の6月にはニューヨークの Park Theatre でも上演された。また *Superstition* は1824年3月12日に Chestnut Street Theatre で初演された。しかし、当時のイギリスの人気作家 Walter Scott の叙事詩 *Marmion* (1808) を劇化した *Marmion* (1812) は、ニューヨークで初演の後フィラデルフィアでも上演されている。

James Nelson Barker は1784年6月17日フィラデルフィアの名家に生まれた。父親は1808年と1809年にフィラデルフィア市長を務めたが、彼自身も1819年にフィラデルフィア市長を務めている。それより先、1812年から15年まで続いたイギリスとの戦争で、彼は砲兵隊の大尉としてカナダとの国境地域の戦闘

に参加した。その後彼が熱烈に支持する民主党の大統領 Andrew Jackson の指名によって、フィラデルフィア港湾関税徴収官を 1829 年から 38 年まで務め、さらに次の大統領 Martin Van Buren に指名されて連邦財務省次官となり、亡くなるまで財務省との関係は保たれた。

2.

The Indian Princess; or, La Belle Sauvage は作者が “an operatic melo-drame” と呼び、作曲者 John Bray の楽譜は、戯曲とは別個に同じくフィラデルフィアで出版されている。この作品の素材は Captain John Smith (1580-1631) の *The General Historie of Virginia, New England, and the Summer Isles* (1624) である。

第一幕は、第一場で John Smith を先頭にイギリスからの最初の開拓者たちがヴァージニアの海岸に到着した喜びが描かれ、第二場では冒険家 Smith に従ってトルコで戦闘に加わったことのあるお付きの Walter の口から Smith の勇敢さが語られる。さらに Walter と彼がこの荒野に伴ってきた愛妻 Alice との熱愛ぶりが見せつけられて、アイルランドに恋人を残してきた Larry に激しいホームシックを覚えさせ、副官 John Rolfe のお付きの、臆病なくせに無鉄砲な Robin に未開地に来た後悔の念を覚えさせる。

この Walter と Alice の愛の交歓のシーンや Larry が恋人 Kate への想いを歌ったり語ったりする、開幕早々の情景は重要である。なぜなら、それは誰でもが知っている北アメリカ大陸への第一歩という歴史的な事実を示しながら、このドラマが愛について語ろうとしていることを印象づけるからだ。また、Larry に観客の笑いを誘うようなアイルランド性を強調させたり、Robin に開拓者としては不向きな臆病さを強調させたりすることによって、作者はこのドラマの語り口が四角四面なものではなく、肩のこらないユーモラスなものであろうと努めている。

第一幕第三場ではインディアン側を描く。場面は Algonquin 族の大酋長 Powhatan の居住地 Werocomoco である。酋長の娘 Pocahontas は、政治的な思惑によって別の強力な部族 Susquehannock の酋長の息子 Miami との婚礼を間近に控えている。しかし、彼女は “his daughter trembles to look upon the fierce Miami”



Pocahontas

(585). と侍女 Nima に語り、獯猛なその相手が気に入らない。一方で Miami は他人より優れた男としての自分の能力を誇り、バッファローや熊をこん棒で叩き殺して皮を剥ぎ、月に向かって吠えている狼をトマホークの一撃で殺し、今にも飛びかかろうと身を潜めている豹の心臓を弓矢で射抜いたことがあると手柄話をして、彼女の関心を得ようとする。

第一幕第四場では、Smith が同行した探険隊から離れて、たった一人で奥地へ踏み込んでインディアンに包囲され、彼らと勇敢に戦った後で、彼の戦いぶりを見ていた Powhatan の息子 Nantaquas から戦争の神 Aresqui のように強いと称えられ、兄弟の契りを結びたいという申し出を受ける。この Nantaquas という人物は、実際に Smith の力になってくれたインディアンで、実在の Captain John Smith は、この戯曲で扱われているように 1607 年にヴァージニアにやって来て、まず *A True Relation of such occurrences and accidents of note as hath happened in Virginia since the first planting of that Colony* (1608) を書いているが、その中で彼が捕らえられて大酋長 Powhatan に謁見を許されるシーンがあり、どうしてイギリス人とアメリカ・インディアンとの意志疎通がいきなり可能だったのか疑問は残るが、そこで交わされる会話の内容と、戯曲のここでの Nantaquas との会話の内容とに類似点がある。すなわち、Smith はどこから来たのかという質問に対して、広い海の向こうから来たと答え、それではそこから太陽が毎朝昇るのだなという仮説に対しては、太陽は常に夜を追いかけて世界を回っているのだと説明する。

ところが *A True Relation* によれば、

Being seized on me, they drew me out and led me to the king. I presented him with a compass dial, describing by my best means the use thereof; whereat he so amazingly admired as he suffered me to proceed in a discourse of the roundness of the earth, the course of the sun, moon, stars, and planets (Smith 8).

とあり、Smithは大酋長(the king)に直接話をしたとされている。

戯曲では、Smithが“Prince, the Great Spirit is the friend of the white men, and they have arts which the red men know not” (587). と言って、自分たち白人はインディアンの知らない技術を教えるために国王の命令を受けてここに来たのだと告げ、Nantaquasとの間に友好関係が出来上がるのである。しかし、他のインディアンたちはふたたびSmithを取り囲み、Nantaquasの制止を振り切って、彼を連れ去ってしまう。

作者BarkerがNantaquasという人物を活用したのは賢明だった。というのは、これから展開されるストーリーの中で、大酋長Powhatanは一定の理解力はあるものの、首長としての職務上インディアンと白人との間で中立的な立場をとり、若い息子のNantaquasが未知の世界に対する強い興味を示したり、人種の違いを越えた人間的なつながりに目覚める方が、より説得力があるからである。

第一幕の最終場面は、女恋しいRobinがWalterの妻Aliceに言い寄って失敗する幕間狂言で始まる。この場ははじめからLarryが木陰から覗いており、WalterもSmithを見失い、インディアンに襲われて逃げ帰ったところだった。

ALICE. Master Robin, if you follow me about any longer with your fooleries, my
Walter shall know of it.

ROBIN. A fig for Walter! is he to be mentioned the same day with the dapper
Robin? can Walter make sonnets and madrigals, and set them and sing
them? besides, the Indians have eat him by this, I hope.

.....

Come, pretty one, quite alone, no one near, even that blundering Irishman
away (588).

Robinは自ら小粋な男(dapper)と称し、ソネット(短詩)もマドリガル(恋歌)も作詞作曲できるし、歌うこともできると自慢し、実際に歌ってもみせる。その上、Aliceの夫(Walter)は今頃インディアンに食われてしまっているのではないかとも言ったり、周りにはあの間抜けな(blundering)アイルランド人

(Larry) もいないからと言って、彼女に迫るのだ。しかし、Walter も Larry もそれぞれ隠れて二人の会話を聞いているのである。ここは Robin 役の俳優の見せ場であり、観客は安心してそれを楽しむことができる。これは古典喜劇の常套手段の一つで、たとえばモリエールの『タルチュフ』第四幕で、夫がテーブルの下に隠れているのを知らずに、タルチュフがその夫人に言い寄る場面と同様、観客はその人物の女性を誑かす技量とそれを演ずる俳優の技能に期待する。

その楽しい場面の後に、Walter によって Smith 隊長の行方不明が伝えられ、副官 Rolfe と幹部の Percy が登場して、翌朝早く隊長捜索に出発することが決定される。ここで副官は事件を一般に公にしないように注意を与えるが、それは植民者一行の中での反乱を防ぐためだと説明する。

現実に 1606 年 12 月 20 日にロンドンを三隻の船で出発した 120 人の植民者一行は、18 週間かかって 1607 年 4 月 26 日にヴァージニアの Chesapeake 岬に到着し、5 月 14 日に上陸を始めるが、長旅の船上でも、その後彼らが築いた Jamestown でも、人びとの不平不満がいろいろな形で噴出した。それが戯曲の中でこうしたせりふとして残されているのである。一行の隊長だった Captain Newport が 6 月にイギリスに一時帰国した時、この開拓地の人口は男ばかり 104 人で、それから半年後までに 51 人が病気や飢餓で死んだ。(Morison 87)

Captain John Smith は Captain Newport の評議会の一員であり、他に評議員として George Percy の名が見える。この George Percy が、多分前述の幹部 Percy のモデルであろう。

この第一幕第五場では、Rolfe と Percy の愛をめぐる会話によって、戯曲全体に流れる愛のテーマがさらに鮮明となる。本国で失恋してこのプロジェクトに参加した Percy を慰めようとする Rolfe は、自分にもさまざまな恋愛経験はあるが、ヨーロッパの女性は気まぐれで移り気だから、むしろインディアンの女性と結婚した方がいいと言って、Percy にもいつまでも不実な女性にくよくよ思いを寄せていないで、さっぱり忘れてしまうことをすすめる。その結果彼に新たな決意をさせることに成功する。

第二幕の第一場は、いよいよ捕らわれた Smith の運命が決まる Werocomoco の Powhatan の宮殿が舞台となる。正装をした大酋長をはじめとして、彼の夫人たちや戦士たち、呪術師の Grimosco、Pocahontas の許婚者 Miami、Nantaquas、

Pocahontasなどが居並ぶところにSmithが引き出される。Powhatanは一同に「海からやってきた不思議な白い生き物」としてSmithを見せ、まずMiamiにその処遇についての意見を尋ねる。

Miamiの主張はこうだ。この連中はおそろしく大きなカヌーで大海原のかなたから現れ、われわれの実に豊かな財産を略奪しようとしている。この異邦人はわれわれの兄弟を6人も殺した。彼らの心おだやかならぬ魂が山の向こうで休息する前に、復讐をしなければならない。彼らはこの異邦人の血を求めている。(593)

それに対してNantaquasは反論し、父親の大酋長と戦士たちに訴える。この勇敢な白人は300人もわれわれのつわ者たちに取り巻かれてもびくともせず、電光を手を持って立ち向かってきた。彼が腕を振り下ろすたびに、戦士が倒れた。自分は彼を神なのではないかと恐れ、その場で身動きさえできなかった。戦闘が終わると、自分は彼の前に友好の手を差しのべて、彼と兄弟の契りを結んだ。だから、その約束を破るわけにはいかない、と。(593-594)

Pocahontasも兄の主張に同意の声をあげる。

しかし、呪術師Grimoscoは大霊(the Great Spirit)が自分にお告げを下したとし、あの異邦人たちはわれわれの神の子ではないから、彼らの頭の皮を剥ぎ、彼らの血でわれわれの手を洗わなければならないと言って、白人入植者たちすべての抹殺を主張する。

Nantaquasは呪術師の見た夢が間違っただけで、この白人は大霊に愛されており、彼らの国王の命によってわれわれに知恵と幸せを与えるためにわざわざ来てくれたのだ、とさらに強く訴えかける。

一方Smithは死を覚悟している。彼はインディアンが先に攻撃をしかけてこなければ、自分は彼らの友だちにもなれたであろうし、新しい技術を教えたり、さまざまな贈り物をもたらすこともできたであろうと述べ、だが自分が死を恐れていると思っては困る、処刑台へ連れて行けと促す。

Miamiの三つ目の合図によってトマホークがSmithの首に振り下ろされることになっている。Pocahontasはなお戦士たちにも、大酋長にも、さらにはMiamiや呪術師にも助命を訴えるが、ついに三つ目の合図がくだされた時、彼女は処刑台のSmithに走り寄って、彼の頭を自分の胸にかき抱き、父親の大酋

長に問いかける。

My father, dost thou love thy daughter? listen to her voice; look upon her tears: they ask for mercy to the captive. Is thy child dear to thee, my father? Thy child will die with the white man (595).

それに対して Powhatan は彼女に貝殻玉の首飾りを渡し、Smith 助命承認の意を表す。

Powhatan は Nantaquas が白人と交わることを許し、彼が Smith をキャンプ地まで送って行こうとすると、Pocahontas もその一行に加わる意向を示す。彼女のその行動を阻止しようとする Miami の警告の聲に彼女ははっきりと言う。

Away, cruel Miami; you would have murdered my brother!— (595)

Smith 救出のこのシーンはたしかにドラマティックであり、Pocahontas の捨て身の行動は感動的でもある。Smith が後に綴った報告の中にも書かれている事実だが、この戯曲が彼を中心に据えたものではないので、このシーンはストーリー展開の早い段階に設定されている。

第二幕第二場は Smith 搜索のための森の中のシーンで、Rolfe と Percy の一行では、いまだに恋人を忘れ難い Percy が彼女を想う歌をうたい、Walter, Larry, Robin の別の一行では臆病な Robin が絶好なからかいの対象にされている。

やがて Smith を見送る Pocahontas, Nantaquas らインディアンの一行に Rolfe らが加わり、Walter らも合流する。しかし、Robin だけはインディアンの姿に恐れをなして、樹に上って隠れる。

この戯曲の核心をなす Pocahontas と Rolfe との出会いはここで丹念に描かれ、そのロマンスをユーモラスな形で補強するために、Pocahontas の侍女 Nima の前に Robin が樹から飛び降りてきて、二人の初めての出会いとなる。

Nantaquas が Pocahontas を家に帰して、Smith をさらにキャンプ地まで送って行こうとすると、彼女は Rolfe に話しかける。Rolfe の方もすでに彼女の姿を一目見て、その感動を今までは自分が恋の相談役であった Percy にそっと打ち明

けている。

Tell me, in sooth, didst ever mark such sweetness! Such winning—such bewitching gentleness! (600)

Pocahontas は Smith が贈り物を持って Powhatan の居住地を再訪すると約束して去ったので、Rolfe にあなたも Werocomoco に来てくれますか問いかけ、あなたの目の色は他の白人の目の色とは違うし、声も他の人とは違うと言って、彼に対する強い関心を示し、Smith に対しては “brother” と呼んだのに、どうして自分を “stranger” と呼ぶのかと彼が尋ねると、彼女は答える。

..I feel the name thou art, but I cannot speak it (601).

同じように、彼に “princess” と呼ばれることに異議を申し立て、彼女は自分を “king’s daughter” と呼ばないで欲しいと要求して、さらに続ける。

If thou feelest the name as I do, call me as I call thee: thou shalt be *my* lover; I will be *thy* lover (601).

そして彼女は自分の胸のときめきを無邪気に彼に訴えるのだ。

To-day before my heart beat, and mine eyes were full of tears; but then my white brother was in danger. Thou art not in danger, and yet behold—[Wipes a tear from her eye.] Besides, then, my heart hurt me, but now! Oh, now!—Lover, why is it so? (601)

Smith が危険な目に遭っている瞬間には、心臓の鼓動が激しくなって、胸が痛み、眼に涙がいっぱいになったが、今あなたが危険にさらされてもいないのに涙が出ている、これはなぜだろう、と言うのだ。

Pocahontas の侍女 Nima と恋を語っていた Rolfe のお付きの Robin は、キャン

プにもどる Smith の一行に遅れてはいけないと主人に声をかけて、その場をいっしょに去ることになる。Pocahontas も Rolfe とは別れ難いが⁸、Rolfe も同様である。

My angel! there shall not a sun rise and set, ere I am with thee. Adieu! thy own heavenly innocence be thy safeguard. Farewell, sweet love! (602)

彼女といっしょにいなければ一日を過ごすこともできないほど彼女に恋いこがれていると、彼は自分の内心を彼女に訴える。

Nima も Robin との愛の一時の想いを女主人に打ち明ける。

Princess, white men are pow-wows. The white man put his lips here, and I felt something—here—[*Putting her hand to her heart* (602).

彼女は白人は魔術師なのではないかと言い、Robin に口づけをされたら胸にときめきを感じたと、奇跡的な事実を語る。

こうして白人とインディアンとの二組のペアが出来上がり、このドラマの目指す愛のテーマはほぼ達せられた。これ以降のシーンは、白人入植者側と土着インディアン側との間の決着と、さらなるロマンスの展開による全体としての祭祀的な雰囲気醸成である。

Pocahontas が森の中に入って行く Rolfe を見送ると、彼女と Rolfe の様子を盗み見ていた Miami がそこに現れて、なぜ自分のような人並み優れたインディアンが白人に負けなければならないのか、Powhatan の娘を花嫁として連れ帰らなければ自分は部族の者たちからあざけられると言って、無理にでも彼女を連れ去ろうとするが、彼女のお付きの者たちがそばにいることからそれは思い直し、嫉妬に燃えてその場を去って行く。

第二幕の最終シーンは Werocomoco の Powhatan の宮殿で、Pocahontas が父親に決められていた Miami との結婚を破棄することを認めてもらい、Powhatan は Miami からの最後通告の「赤い斧」を受け取って、Susquehannock 族との戦闘の準備を整える。

第三幕が始まる時点ではすでにインディアン同士の戦闘は終わり、Miamiは捕虜になっている。第一場のJamestownは入植者たちがようやく作り上げた最初の砦である。ここではすでに第一幕で示されていたSmithのお付きのWalterとKate夫妻の愛のシーンが復習的に繰り返され、戦闘に参加して功績をあげたSmithらの一行は、Nantaquasの招待を受けてPowhatanの勝利の祝宴に連なるべくWerocomocoをめざす。

第三幕第二場は、森の茂みの中でのRolfeとPocahontas、RobinとNimaの愛のシーンに続いて、呪術師Grimoscoと捕らわれのMiamiとの解放への密約、GrimoscoがPowhatanを呼び出し、“the Spirit”のお告げとして白人たちへの警戒を訴え、祝宴での白人皆殺しを提案する場面となる。大酋長は恩義のある白人たちへの裏切りを認めようとしませんが、呪術師はPowhatanが白人に慈悲を与えたことによって“the Spirit”を怒らせたのだと脅し、その怒りを鎮めなければ、今後インディアンの他の部族から見放され、先祖代々の土地からも追放されることになるだろうと予言して、Powhatanを説得することに成功する。しかし、この場の状況をそっと見ていたPocahontasは、その危険を知らせるために祝宴の会場へ急ぐ。

一方で、GovernorのDelawarをはじめ500人の新たな入植者が9隻の船に乗って到着したというニュースがもたらされ、その中に少年に扮した二人の女性がいて、その一人がアイルランド人Larryの恋人Kateであり、もう一人が幹部Percyの恋人であって、かつ今度の船でいっしょだったGovernorの姪Geraldineであることがわかる。この二組の新たなペアの発見については、作者は第三幕第三場Jamestown、第四場Werocomocoの祝宴騒動の後を使って十分に観客を楽しませる。変装というのを使い古された演劇的手法ではあるが、彼女たちには長い苦しい航海という現実を乗り越えて、それぞれヴァージニアへやって来る必然性があり、現実的にそれを男装することで克服したということになる。

インディアン側のストーリー完結は、Werocomocoの祝宴で呪術師がMiamiに約束した通りSmith以下白人出席者全員の虐殺によって達せられるはずだったが、今度もPocahontasの活躍によって、Grimoscoの三度目の合図で振り上げられたインディアンのトマホークはDelawarの率いる白人兵士たちによって没収され、Miamiは自決する。

史実によると、1607年5月14日にCaptain Christopher Newportに率いられた一行がChesapeake湾の低地に上陸して、粗末な住居と教会のある砦を作り、それをJamestownと呼んだが、6月になると、Captain Newportが物資と人員の補給のために本国へ帰り、その留守の六か月間をJohn Smithがあずかることになる。彼はPocahontasを通じてPowhatanと友好関係を結んで、生き残った約50人の命を救った。

1609年にSmithは弾薬によるアクシデントに遭って本国へ帰り、John Percyが総督(president)になる。同じ年、このヴァージニア植民を推進していたVirginia Companyは9隻の船団を“London’s Plantation in the Southern Part of Virginia”(この植民地の正式名称)に送り出すが、その旗艦がBermudaで難破したので、船団が目的地に着いたのは1610年5月だった。一行には隊長のSir Thomas Gatesの他John Rolfeがいた。しかし、開拓地の惨めな現状を見たGatesは生存者を本国に送り帰すべく、全員を乗船させ、まさに出帆しようとした時に、すでに開拓地の“Governor”に任命されていたLord De La Warrの船団が300人の入植者と十分な補給品を運んできたので、Jamestownは救われた。(Morison 87-89; Vollmann 677)

またRolfeは西インド諸島からタバコの種子を輸入して、本国の市場で好まれる良質な製品ができることを1613年に発見した。彼は入植者たちに捕らえられ、Jamestownの牧師の家に住んでいたPocahontasと知り合って、結婚する。彼女はキリスト教に改宗して、洗礼名をRebeccaといった。二人の結婚は植民地総督にも大酋長にも祝福され、二人の間には息子Thomasが生まれた。1616年に一家は招待を受けてイギリスへ渡って大歓迎を受け、国王James Iにも謁見を許された。しかし、彼女はイギリスで1617年に天然痘で亡くなる。21歳だった。(Sahlman)

おそらくBarkerは歴史上のPocahontasとRolfeの結びつきを異人種間、異文化間の結びつきの可能性として捉え、その蓋然性を他のいくつかのロマンスの中に包み込んで舞台上に示そうとしたのであろう。その意味で、作者の発想は先駆的であり、娯楽的な要素を十分に含みながら、そこに実は強いメッセー

ジが込められているのである。

3.

*Superstition; or, The Fanatic Father*は1675年頃のニューイングランド地方の寒村が舞台になっている。この村は当時のこの地方の他のコミュニティと同じように、中心は教会であった。第五幕第二場で、牧師からの要請によって植民地政府から複数の判事がやって来て、妖術裁判の法廷が開かれるのは教会においてである。

牧師 Ravensworth は妻に先立たれ、娘 Mary と二人暮らしをしている。彼女には Charles という恋人がいて、彼は三年前に母親といっしょにイギリスから来て、この村の高台に建つ大邸宅に住んでいるが、現在は大学に行っているので、日常的に二人が出会うことはない。

Charles の母親 Isabella を村人たちは “mysterious stranger” (不思議なよそ者) と呼んで、警戒し敬遠している。それは彼女が何者かわからないからだ。Mary によると、自身の母親が亡くなった時、近くに住む彼女がやさしく声をかけてくれたという。しかし、Isabella は普通の村人たちとは違う、裕福そうな生活を送る高慢な婦人として、人びとから妬まれ、憎まれてさえもいる。ことに Ravensworth は彼女が自分の教会に礼拝に来ないことから、彼女の信仰心を疑っていた。

ドラマは、地域社会を信仰の観点から支配しようとする牧師と、彼の支配下に入らない異端的な存在という二つの対立軸を中心に展開する。

Isabella の息子 Charles は規則を守らないという理由で大学から追われて母親の元に帰ってくる途中道に迷い、夜の森の中で洞窟に住む不思議な男 (The Unknown) に出会う (第二幕第一場)。その男は毛皮を身につけ、銃を持ち、野性的な姿ではあるが、物腰に気品がある。はじめは Charles に対して友好的でなかった男が次第に打ち解けてきたので、Charles は問われるままに自分の名を名乗り、母の名前も告げ、イギリスから来たばかりだと言うが、男は自分について孤独な獵師だとのみ答え、自分とここで出遭ったことは絶対に口外しないでくれと念を押す。

この男 “The Unkown” は、実は Isabella の父親である。彼は Charles I の処刑を決定した (1649 年) 特設高等法院の判事の一人で、Charles II がその後 1660 年に王位についてから出した逮捕命令の対象とされ、19 年前に新大陸に渡って逃亡生活を送っていたのである。Isabella はその父親を探して、アメリカにやって来たのだった。作者がこの人物のモデルとしている (Quinn 147) Goffe あるいは Gough (1605-1679) は、裁判後 Cromwell の下で軍の指揮をとり、ピューリタン革命軍のために功績を上げて少将の地位まで昇るが、王政復古でアメリカへ逃亡している。

一方、夜が明けて Charles が家路を急ぎ、Ravensworth の家に近づくと、恋人の Mary が若い男に襲われそうになっているのを見て、彼は男に飛びかかり彼女を助ける。しかし、妨害された男は怒って、Charles に決闘を申し込む。誠実な Charles はそれに応じ、2 時間後に村の東のはずれの林で出会う約束をする。(第二幕第二場)

この若い男は George Egerton といって、叔父の Sir Reginald Egerton についてアメリカに来ているしゃれ者のイギリス人である。Sir Reginald は「王殺し」の一人の行方を探しに来ているのだ。この二人はハンターの出で立ちで荒野を歩き回っているが、当時の Charles II の宮廷を彷彿とさせるような都会的な雰囲気漂わせ、融通のきかない生真面目なピューリタン社会ときわめて対照的である。二人は次のようにロンドンとニューイングランドの相違について語る。

SIR REGINALD. They've good laws here for gallants—t' other day
They put a man i' the stocks because he kiss'd
His wife o' Sunday.

GEORGE. They were in the right.
Kiss his own wife! it is a work-day business;
Play-days and holy-days are made for lovers.

SIR REGINALD. To lay hands on a maid here's present death.

GEORGE. It might be so in London, and no lives lost:
The law were a dead letter there— (44)

Charlesは彼の帰りを待つ母親の元にもどるとすぐ、従僕に命じて決闘用の長剣を用意させ、先に指定の場に急がせる(第二幕第三場)。ドラマの展開は早く、この後に続く第三幕第一場で、すぐに決闘ということになり、簡単に決着がつく。自分の腕前を誇っていたGeorgeは開始早々に傷を負われ、“I'm out of practice”(53)と負け惜しみを言いながらも、Charlesの手によって土手に導かれ、木の幹に寄りかからせられて、敗北を認める。さらにCharlesは出血を押さえるために自分のハンカチを渡し、この決闘についてはMaryの名誉のためにもGeorge自身の名誉のためにも口外しないようにして欲しいと告げてその場を去るが、すぐ後に担架をよこして、Georgeを運ばせる。

しかし、最終シーンの第五幕第二場の法廷で、このハンカチは血で汚れ、剣(たぶんGeorgeのものであろうが)とともに提出され、ハンカチにCharlesの名前が記されてあったことから、彼はそれを自身の所有物と認めざるを得ず、それらが発見された場所に血を流している男がいたという事実の説明を求められることに発展する。

また、決闘が行われた後に、インディアン襲来という村の重大事件が起こる。

この時代のインディアン問題がどうなっていたかということ、Wampanoag族酋長Metacomは白人の間ではKing Philipとして知られ、彼らはそもそもニューイングランド地方に初めて入植したPilgrim Fathersとは友好関係にあった。Metacomは1662年からその地位にあり、すでに彼らの土地は白人への売却によってかなり減っていたが、彼は派手な服装を好みボストンでつけの買い物をしては、それを土地の売却で支払っていた。Plymouth植民地の人たちの方も、家畜が彼のトウモロコシ畑に入って作物を荒らすことを押さえられなかったし、酒の密造者たちがインディアンに酒を売りつけることを押さえられなかった。それに彼は三度法廷に出頭させられ、罰金刑を受けたことがあって、威厳をひどく傷つけられていた。

Metacomは白人に対抗するために近隣のインディアンを結集することを計画していたが、それを彼の秘書でハーヴァード大学出のSassamonが植民地総督Edward Winslowに密告した。そのために秘書は殺され、殺人犯のインディアンたちは逮捕されて裁判を受け、インディアンを含む陪審員によって絞首刑にされた。

インディアンの「人を殺すこと」に対する見解について Samuel Eliot Morison の記述は興味深いものがある。

Indians thought it all right to kill in a fight, or to torture a prisoner to death; but to hang a man after trial violated their deepest feelings of morality (Morison 158).

裁判にかけて人を絞首刑にすることは道徳に反すると考えたというのだ。

処刑の二週間後 1675 年 6 月にプロヴィデンスに近い Narragansett 湾の開拓地 Swansea が襲われ、Metacom 自身は翌年 8 月仲間割れした他の部族の者に殺されるが、それから三年間白人入植者対インディアンの戦争は続き、それは King Philip's War と名づけられた。

戯曲の中のインディアン襲来は、いまだに不安定な状況にある植民地の現実を示すものであるが、ここでただ慌てふためくだけの住民たちを統率し、インディアンを追い返すことに成功するのが The Unknown である。

第三幕第二場の村のシーンには、主要なすべての人物が登場する。Ravensworth と彼の相談相手の法律家 Walford も、彼らのそれぞれの娘 Mary と Alice も、Isabella と Charles 親子も、Sir Reginald も姿を現すが、遠くからインディアンの叫び声、警戒の鐘の音、散発的な銃声が聞こえ、火の手が上がる中で、The Unknown がいきなり一同の前に現れて一喝するのだ。

Turn back for shame—as ye are men, turn back!
 As ye are husbands, fathers, turn, and save
 From death and violation those ye love.—
 If this not move you, as ye are Christian men
 And do believe in God, tempt not his wrath
 By doubting thus providence. Behold
 I am sent to save you (56).

彼は “providence” (神意) という言葉を使い、神を信じ、キリスト教徒にふさわしい行動をせよと説き、自分は神によって遣わされた者だと言って、男たち

に具体的な隊形を指示し、自ら戦闘に参加して、村人たちを勝利に導く。戦いが終わり、彼がもどってくると、牧師だけはまだ疑い深い不快な表情を崩さないが、村人たちは体がかがめ両手を差し出して、畏敬の念を表す。それに対して The Unkown は次の一言を述べ、Isabella の方を一瞥して、その場を立ち去って行く。

No; not to me this homage—not to man

Is your this day's deliverance owing.

There—

To heaven address your gratitude.

To God

Stretch forth your hands and raise your swimming eyes.

Before Jehovah bend your bodies down,

And from your humble hearts pour out the flood

Of Thankfulness. It was his care that watch'd

His eye that saw; his arm that smote the heathen—

His be the praise and glory (57).

今日の功績はすべて神の恩恵によるものであるから、神に感謝せよと言うのである。

彼が去ると、Walford はあの人は “an earthly being” であろうかと疑い、娘 Alice は “It was not a mortal.” と畏怖を表し、Charles は、戦闘の中で彼の腕が激しい稲妻のように振り下ろされると、すべてのものが生気を失ったと具体的に彼の戦闘能力の高さを賞賛する。だが、牧師だけはあれは天使なのか悪魔なのかどちらかわからないが、“Illusion, strong as Hell must yield to Truth” (58). だとして、今に真実がはっきりすると、この不思議な人物に宗教的な疑いを持ち続ける。

第四幕第二場に至って、Isabella は、インディアンの襲撃事件の奇跡的な結果を彼女親子の不思議な存在と結びつけて異端視する村人たちに嫌気がさし、明日にでもこの地を去りたいと Charles に語り、今まで話したくても話せな

かった自分自身に関する事実を彼に話し始める。彼女は自分の母親を知らず、15歳にもならないうちに愛国者の父親と離れ離れにされたが、反逆者として新大陸に逃れた父親が生存しているという噂が聞こえてきたので、ここへ彼を探しにやってきたのだと言う。しかし、Charlesのこれまでの大きな疑問は、自分の父親はだれなのかということである。そのことについて彼女は言葉を濁し、最後まで言わない。ただ彼女は不誠実な親戚に預けられ、その裏切りによってひどい目にあわされたが、そこから逃げ出してCharlesを生み、それから彼は彼を唯一の希望として偽名を使って生きてきたのだとだけ説明する。

牧師をはじめ村人たちも、これまでの経過を舞台で見てきた観客も知りたがっている彼女の出自は、ドラマのほとんど最終シーンでようやく明らかにされる。それはCharlesが無実の罪で処刑され、彼の遺体が法廷に運び込まれた後であった。Sir Reginaldが入ってきて、書類を一同に示す。

Behold these papers,

They're from the king! They bid me seek a lady,

Nam'd Isabella, whom he espoused in secret

And her son Charles Fitzroy—And is it thus— (71)

そのすぐ後で、IsabellaとThe Unknownとされてきた父親とが再会し、Sir Reginaldは彼が彼女の父親であるならば、彼に対する国王からの恩赦状を持ってきたと告げる。国王とは王政復古(1660年)以来その地位にあるCharles IIであり、Isabellaがひどい目にあわされたと言う相手だった。つまり、Charles IIがCharlesの父親だったのである。

第四幕第三場と第四場はCharlesとMaryのデートの場である。自分の家の前で彼を待ちあぐねて、彼女は鍵をかけて家の中に入る。彼は彼女の父親Ravensworthが会議に出席中で留守であることを知っている。彼は玄関から入れないので裏口に廻り、彼女の部屋の窓から入るが、彼女は父親が帰宅して見つかることを恐れている。父親は二人の付き合いを禁止しているのだ。

I do not say I did not wish you here—

Yet I must wish you gone. It is so wrong—
I am so much to blame— (65)

Maryという女性はたしかにCharlesを愛しており、父親に禁止されても愛することを止めようとはしないが、反抗的な態度に出るような娘ではなく、“wrong”とか“so much to blame”という言葉を使って、父親の言いつけに反している自分の行動を自覚している。

このシーンはやがてCharlesにとって致命的な結果をもたらすことになる。すなわち、二人は彼女の部屋でいっしょにいるところを帰宅した牧師に見られ、牧師はCharlesの行動を“contemplated rape”（強姦未遂）と断じ、これより先に決闘でGeorgeを傷つけたことを“contemplated murder”（殺人未遂）として、彼が植民地政府に請求して開いた法廷に訴えるのである。

裁判が始まると、まずIsabellaが被告として尋問される。罪名は“sorcery”（妖術）である。検事役を務める牧師Ravensworthは、真っ赤な彗星が空に飛んで天の怒りが現れているとか、葉枯れ病や日照りによって収穫が少なくなっているとか、火災や疫病や飢饉が頻発しているとか、インディアンの襲撃によって平和が乱されているとか、そうした不幸な開拓地の現状があたかも被告の妖術のせいであるかのように述べ、判事から具体的な告発理由を求められると、牧師は彼女が一度も教会に来たことのない傲慢な不信心者であることを述べる。さらに判事が何か証拠を出すように言うと、牧師は彼女が自分の罪を自覚して今晚この村から逃げ出そうとしたとし、その証人に彼女の二人の使用人を呼び出してであると答える。

被告のIsabellaは自分がアメリカに渡って探している父親の名前こそ言わないが、牧師が偏見に基づいて自分を非難しようとしているのであって、どんな追求にも答えるつもりであると述べ、信仰については神と自分の良心との問題であり、教会に行くか行かないかということとは関係がないと、牧師の弱点をつく。

牧師はさらなる証拠の提出を求める判事に対して、Charles告発の方が容易であると考え、方針を切り替える。「強姦未遂」について牧師は、彼が妖術を使って娘をかどわかし暴力を振るおうとしたのだとして、彼の返事を要求する。

しかし、彼は一切の弁明を拒否し、判事から注意を受け、傍にいる母親からも心配の声が上がるが、それでも Mary を証言台に立たせないように慮って一言も言わない。「殺人未遂」については、彼が “the strange being,/ Who, like a supernatural visitant,/ Appear'd this day among us” (69). と早朝森の中で会話を交わしているのを目撃した証人がいるが、その相手は何者なのかと牧師はただし、判事は彼の名前が書いてある血に汚れたハンカチを示して、ハンカチのそばに血を流した男が倒れていたという事実の説明を彼に求める。彼はハンカチは自分のものであり、偶然ある男と出会って決闘し、相手を傷つけたのだと言うが、それ以上は説明しない。この決闘について説明するためには、Mary の名前を出さないわけにはいかず、彼としてはあくまでも彼女を証言台に立たせたくないのである。

Mary は黙っていられずに父親の牧師に発言の許可を求めるが、許されない。彼女がようやく発言したのは、法廷から引き出されようとしている Charles が自分の名を呼んでいるのを、気を失って朦朧とした意識の中で聞いた時だった。

He's innocent—he's my betroth'd—my husband!

He came with my consent—he's innocent! (70)

彼女が彼の無実を訴えても、頑な牧師は彼の妖術が彼女に語らせているのだと主張を繰り返し、外から聞こえてくる雷鳴は天の怒りの現れなのだと行って、まったく弁明しようとしないう彼を妖術の罪で死刑にするように判事たちに促す。判事たちは立ち上がってなす術を知らない混乱状態にある。そのために、すべてが牧師の意のままに進められ、Charles は連れ出されて首をくぐられ、その遺体が法廷内に運び込まれる。Mary は遺体に向かって語りかけ、ささやくように遺体に顔を寄せたまま死んで行く。

この場面の Ravensworth の様子は、それまで絶望的な態度を見せていたが、時折死んだ娘の方を見たり、天を見上げたりしてから、ふたたび完全に絶望的な状態に陥って、友人 Walford の腕にうめき声を上げながら倒れ込むというもので、すべて彼の独りよがり招いたこの事態をどう考えているのか判断する

ことはできない。

Walfordは法律家という立場からRavensworthの考え方を批判してきた。牧師のように知識で固められた理屈は、迷信 (superstition) に左右されないように守ってやらなければならない無知な大衆を押しつぶしてしまうし、疑うことが危険を意味し、否定することが死を意味するという社会では、言葉の端で人を破滅させ、悪意あるささやきで人の命を奪うことにもなるのだ、とWalfordは言うが(58-59)、Ravensworthにはその批判を冷静に理解することができなかったのである。

閉鎖的、偏狭なピューリタン社会に身元の知れない本国の上流婦人を配し、ピューリタンを敵とするCharles Iをめぐる政治犯をからませ、稀代の遊び人と言われたCharles IIもかかわりを持つこのドラマは、プロットが入り組んでいて興味深い。主題を担う牧師の頑迷さの描き方はやや平板に過ぎ、裁判シーンでの判事たちとの力関係には疑問が残る。たとえば、Arthur Millerの*The Crucible*では、魔女裁判の発端を作るParris牧師は、やはり植民地政府から派遣されて来た判事たちによる裁判に同席するが、あくまで裁判を進行させるのは判事たちであり、牧師はせいぜい証人として発言が許されるに過ぎない。ところがこの戯曲では、被告に対する刑の宣告もなく、牧師の指示で処刑が行われるなど、いかにも恣意的である。Millerが描いたのは1692年の現実であり、Barkerが描いたのは1675頃の現実であるから、時代的にそれほど隔たりはない。その違いは1953年と1824年という作品制作の時代にある。

しかしながら、Barkerがこの時代にニューイングランド地方のピューリタン社会を取り上げ、そこに深く根ざす“sorcery”あるいは“witchcraft”という問題を舞台化したことには大いに意義がある。

Texts:

James Nelson Barker. *The Indian Princess; or, La Belle Sauvage. Representative Plays by American Dramatists, Vol. 1, 1765 to 1819.* New York: Benjamin Blom, 1964.

———. *Superstition; or, The Fanatic Father. The Best Plays of the Early American Theatre.* New York: Crown, 1967.

Works Cited:

Morison, Samuel Eliot. *The Oxford History of the American People, Vol.1.* New York: The New American Library, 1972.

Quinn, Arthur Hobson. *A History of the American Drama, From the Beginning to the Civil War.* New York: Appleton-Century-Crofts, 1951.

Smith, John. *The Oxford Anthology of American Literature, Vol.1.* New York:Oxford University Press, 1951.

Sahlman, Rachel. *Pocahontas.* Spectrum Biographies, www.incwell.com

Vaughn, Jack A. *Early American Dramatists.* New York: Frederick Ungar, 1981.

Vollmann, William T. *Seven Dreams.* New York: Penguin Putnam, 2002.

In Search of American Themes

On James Nelson Barker's *The Indian Princess* and *Superstition*

Yoshiteru KUROKAWA

In *A History of the American Drama* the author Arthur Hobson Quinn writes;

Barker's choice of American themes was not accidental nor was it parochial. He knew other literatures and he made use of them, but he felt keenly the lack of a native drama and he did his best to fill the lack (137).

Barker picks up the legendary Pocahontas story for *The Indian Princess; or, La Belle Sauvage* to be first produced in 1808 at Philadelphia's Chestnut Street Theatre and then in the next year at New York's Park Theatre as "an operatic melo-drame." He also chooses a witchcraft theme in the theocratic New England village for *Superstition; or, The Fanatic Father*, which was produced in 1824 also at Chestnut Street Theatre.

In *The Indian Princess* Captain John Smith who joined 120 member first settlers as one of their councillors and explored Virginian wilderness in 1607 is the central character moving the action. He is caught by Algonquin Indians to be punished for his killing 6 Indians in a gun fight, but their chief Powhatan's dear daughter Pocahontas saves him from his execution. In the process meeting Smith's deputy John Rolfe she falls in love with him.

There are 4 other couples in the play which making up a romantic atmosphere help Pocahontas and Rolfe get married. This is really a rare case of intercultural and interracial marriage at that time.

The playwright probably might have seen a new probability in human relationship in a historical fact where Rolfe and Pocahontas as husband and wife were invited to

England in 1616 and well received in its society.

Superstition depicts a Puritan minister Ravensworth who presides a village and a lady Isabella who lives in a large mansion on a hill. He doubts her because she doesn't attend his church although she came from England 3 years ago.

Several incidents occur in the course of the drama. Her son Charles harms a young man in a duel and the minister finds his daughter in her own room embraced by Charles. And Indians attack the village for which an unknown wild looking man leads the village people to fight back.

Ravensworth calls for the colonial government judges to hold court for witchcraft, because he suspects Isabella and Charles have something to do with some heretical power. In the court they find no proofs for his suspicion, but he insists Charles being guilty for an attempt murder and an attempt rape and dares to have him executed in judges' confusion.

At the end several facts are revealed: that the unknown is Isabella's father who has been pursued as a regicide for Charles I but now is pardoned; that Isabella came to New England area looking for her father who was supposed to be hiding and that Charles is a son between she and Charles II.

Barker here tries to show how cruel and unreasonable the Puritan dogmas can be while he uses a few historical facts and fictions based on facts.